

論文

シンガポールの幼児教育・保育(3)：カリキュラムの枠組みに注目して

埋橋 玲子

同志社女子大学
現代社会学部・現代こども学科
教授Early Childhood Education and Care in Singapore (3):
From the Perspective of Curriculum

Reiko Uzuhashi

Department of Childhood Studies, Faculty of Contemporary Social Studies,
Doshisha Women's College of Liberal Arts,
Professor

はじめに

TIMSS¹やPISAといった国際学力テストで、シンガポールは常にトップクラスの成績を収め、海外から多くの注目を浴びている。国際的に優秀な人材の存在をアピールし外国資本を呼びこむことが経済の基盤である国のひとつのプロモーションであるといえれば穿ちすぎであろうか。教育は大きな国家方略であり、独立以来何度かの大きな変革を行いながら絶えず小さなイノベーションを実行している²。ゴー・トクチュー首相は「21世紀の国家の繁栄は人々の学ぶ能力にかかっている」という信念に基づき「Thinking School, Learning Nation」構想を打ち出した³。

このような構想は幼児教育のあり方にも影響を及ぼさずにはいない。国際的にみても1990年代より乳幼児期への早期介入が大きなトレンドとなっていたが、シンガポールにおいても幼児教育への注目が始まった。ここ20年足らずの間に、シンガポールの幼児教育は目覚ましい変化を遂げている。シンガポールは常に変革を求めて止まない国であるが、そのありようが幼児教育の場にも及ぶようになったのである。

シンガポールといえば、小学校卒業時にはテストの結果でコース分けが行われる教育制度の影響を受け、早期教育が過熱し詰め込み型の早期教育がもっぱらのイメージであった。しかし2003年にはMOE (=Ministry of Education, 教育省)より就学前教育のガイドラインとなるフレームワ

ークNEL (= *Nurturing Early Learner* [幼い学び手を育てる])、2012年改訂⁴)が発行され、遊びや体験を重視する学習を標榜するようになった。

とはいえ、実際に現地を訪れてみると、幼児教育において「遊びや体験を重視する」のは日本と共通するが、教育方法は大いに様相を異にすることが観察される。本稿ではシンガポールの幼児教育のガイドラインであるNELに注目しその概要を示すとともに事例を紹介し、その教育方法について理解を試みる。さらに日本の幼稚園教育要領等との比較により、日本の幼児教育に対する示唆を得ることを目的としている。

1 幼児教育・保育の概況

シンガポールの幼児教育・保育サービスを法に基づいて提供する機関には、MOE管轄下のキンダーガーデン(幼稚園、以下KG)とMSF(Ministry of Social and Family Development、社会・家族開発省)管轄下のチャイルドケアセンター(保育所、以下CC)の2種類がある。KGは就学準備を目的としており、保育時間は3~4時間で、学校と同じく長期の休みがある。CCは1日12時間まで保護者のニーズに応じて1日、半日、一時的に子どもを預かる。KGとCCの運営母体はいずれも私立、NPO、宗教団体、組合、地域財団などである。

政府は、より効果的に幼児教育・保育サービスを提供す

るために、省の枠を超えて合理的な政策実行を可能にする目的でECDA（=Early Childhood Development Agency、幼年期開発局）を2013年に設置した。ECDAはMOEとMSF双方の監督下にあり、拠点はMSFに置かれている。7歳までの子どもの発達の局面にかかわり、KGとCCの両方の統括にあたる。

現在、ECDAはKGとCCの許認可と監督、保育の質の向上、助成金の交付、保護者に対する保育料の減免を含む情報提供、保育者の専門性の向上、と就学前の教育と保育に関わる業務全般を担っている。このうち、保育の質の向上に向けて行なっている事業の一つが、SPARK（=Singapore Pre-School Accreditation Framework）という名称の幼児教育・保育の質の認証事業である⁵。これは2011年よりMOEによって着手された、外部評価により認証を与え質の保証を行うシステムである。SPARKの受審は任意であるが次第に認知度を深め、認証を受けることが園のステータスとなりつつある。

先に触れたが、幼児教育に関してKGとCCの両方に適用されるのがNEL（2012）で、行われるべき幼児教育の全般的なガイドラインとなっている（写真1）。その中に6の「学びの領域」が示されているが、これは日本の幼稚園教育要領等で保育の内容として示される5領域に相当する。これら6の分野についてそれぞれリソースブックがあり、詳細な叙述と豊富な写真と図絵で、保育内容について教育方法と教材／遊具が具体的に示してある。それぞれが数十ページに及び、多いもので100ページ近いボリュームがある。分野ごとに加えて「総覧」があり、最近には「母語教育の枠組み」というリソースブックが加わり、合計で8冊となった。それぞれについて英語・中国語・マレー語・タミル語版がある（写真2-1～6）。

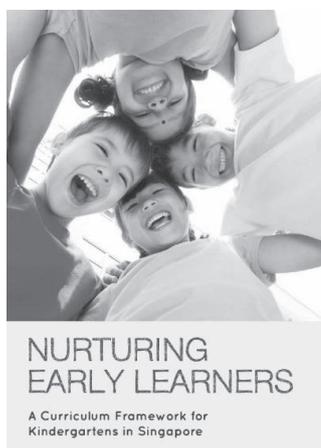


写真1 NELの表紙

2 NEL（=Nurturing Early Learner [幼い学び手を育てる]）

NEL（2012）は日本の幼稚園教育要領に相当するものであり、シンガポールの4歳から6歳までの子どもに質の高い幼児教育を提供することを目的とした、カリキュラムの枠組みであり、KGとCCの両方に適用される。これは日本において平成29年度の幼稚園教育要領等の改訂（定）により「幼児教育を行うべき施設」として保育所、幼保連携型認定こども園共に共通に求められる事項が明示されたことと共通している。

このNELには、まず幼児期の学びの全体像が示されている。中心にあるのが共有されるべき信念、すなわち「好奇心に満ち、能動的で有能な学び手」という子どものイメージである。この信念に基づき、シンガポールの「教育の望ましい成果」に向かい、「就学前教育段階の成果」に至ろうとする。

「教育の望ましい成果」すなわちシンガポールの教育全体の目指すところは以下のような人間の育成である：

- 自信をもつ人間
- 自ら方向づけられる学び手
- 能動的な貢献者
- 思慮深い市民

その目標に向かい、就学までに成し遂げられることが求められる「望ましい就学前教育の成果」は次のようなものである：

- 何が正しく、何が間違っているかを知る。
- 他の人と分かち合ったり、交代したりできる。
- 他の人と関われる。
- 好奇心をもって探求ができる。
- 聞くことができ理解して話せる。
- 機嫌よく過ごせ他の人と仲良くできる。
- 身体の調子が良く、健康な習慣を形成し、多様な芸術的な経験を楽しむ。
- 家族、友だち、先生、学校が好きである。

その成果に至るにあたり子どもが獲得すべき知識・技能が6の「学びの領域」にまとめられ、それぞれに3～5項目の「領域ごとの学びの目標」が示されている：

- 真正的・創造的表現
- 世界の発見
- リテラシー
- 運動技能の発達
- ニューメラシー

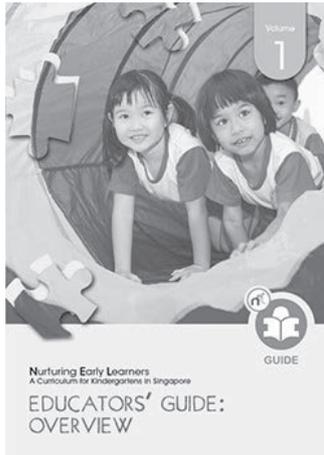
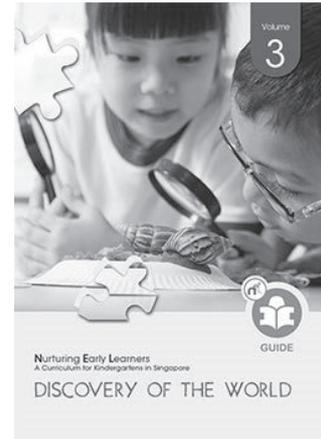


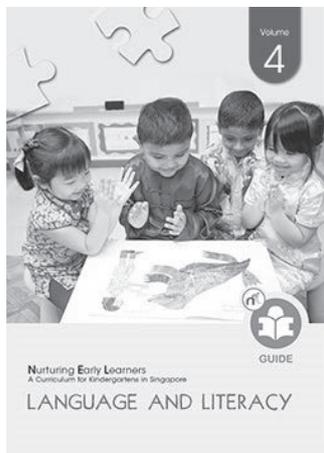
写真 2-1 総覧



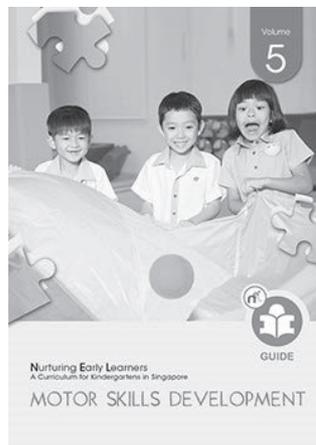
2-2 真正的・創造的表現



2-3 世界の発見



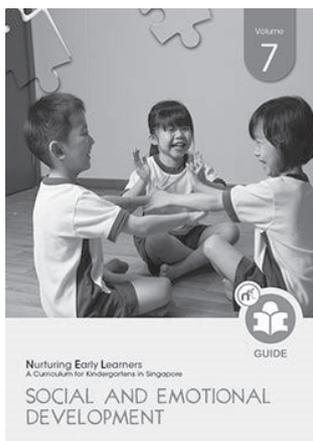
2-4 言語とリテラシー



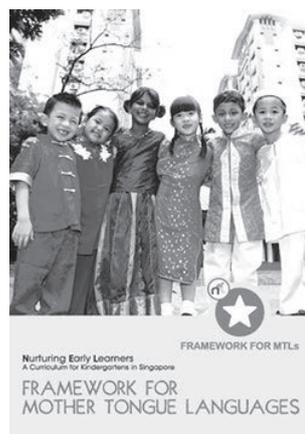
2-5 運動技能の発達



2-6 ニューメラシー



2-7 社会的・情緒的発達



2-8 母語教育のための枠組み

写真2 リソースブックの表紙

- 社会的・情緒的発達

加えて教師は、知識・技能のみならず、学びに対しての肯定的な習慣と態度、すなわち学びに向かう6の構えを育むことが求められる：

- 我慢強くやり通す
- 振り返りができる
- 感謝する
- 創意工夫する
- みずみずしい感性を保つ
- 打ち込む

以上の知識・技能の獲得及び学びに対する構えを育むにあたり、教師は以下の主義に基づき指導(teaching)を行う。これら6の主義はその頭文字を組み合わせた「iTeach」というキャッチフレーズとして表現されている。

- 統合的なアプローチ
- 学びのファシリテーターとしての教師
- ねらいを持った遊びを通しての本質的な学び
- 知の構築者としての子ども
- 質の高い相互関係を通しての本質的な学び
- 全体的な発達

以上の事柄がNELに示された枠組みであり、この枠組みに従って前出のリソースブックがある。これらのリソースブックを参考にして、NELの枠組みに沿って各KGやCCの幼児クラス(4~6歳)のカリキュラムが作成されて幼児教育が実行されるのである。

3 2つの事例

(1) サラダ幼稚園；バイリンガル教育とニューメラシー教育

1) 園の概要

サラダ幼稚園はインドの教団を母体とし、シンガポール在住のインド人家庭の子どもを受け入れている。園名は仏教の女神の名前にちなんだものである。1990年当時、SINDA (Singapore Indian Development Association シンガポール在住インド人向上協会) はインド人家庭の子どもの学業成績について憂慮し、就学前教育の重要性に注目した。2年間の準備を経て、1993年度に2学年(K1、K2⁶)各2クラス、午前クラスと午後クラスのシフトで合計126名の園児を得てサラダ幼稚園が開かれた。今日ではナーサリークラスを含めた3学年合計22クラスで、500名の園児と33人のスタッフを擁している。

新年度は1月に始まり、10週ずつの4学期制でそれぞれ

の学期に休暇がある。午前クラスは8時30分~11時30分、午後クラスは11時50分~3時である。クラスの最大定員はナーサリーとK1が20人、K2が25人で、教師と子どもの比率は順に10対1、20対1、22対1である。保育内容によりアート、コンピュータ、母語等専門の担当者が加わり、1クラスが2つの小グループに分かれる。

保育料は学年によって多少違うが、諸経費を含めて1学期につき1300シンガポールドル前後になる。家庭によっては補助が受けられ、減額される。

2) 園の理念と教育内容

園の理念はHPに以下のように記されている：

—サラダ幼稚園のビジョンは「生涯にわたる学び手を育てる」ことにある。どの子どもにも自信、独立心を培い、学びへの情熱を育み、愛と尊敬、忠誠心や親切心を涵養することが園の理念である。子どもが目の前の困難に知的に挑戦することに備えさせること、自分の文化的社会的出自に誇りを持ちシンガポール人としての自覚を持てるようにすること、日々の道徳を身に着けること、常に最善を尽くす自信を育てることが使命である。サラダ幼稚園の教育の目的は、言語と社会性の発達に特に重点を置き全人的な発達を目指す就学前にふさわしい保育の内容を提供することにある。

教育内容として「第1言語と母語」「スピーチとドラマ」「ニューメラシー」「室内外の遊び(粗大運動)」「音楽リズム」「造形」「コンピュータ」「道徳」「科学」が示されている。

一日の日課としては、登園してくると中央ホールでの全クラスでのアセンブリー(朝礼)に始まり30分ごとにチャイムが鳴り、時間の区切りに従って活動が時間割りのように展開され、合間に間食が提供されトイレタイムが入り、降園前のアセンブリー(終礼)で終わる。活動内容に応じてサポートの先生が入り、クラス担任は1人であっても子どもたちは2グループに分かれ少人数での指導が行われている。

ECDAより「推奨」を受け、数多くのアワードを受賞している。

3) 視察内容

2016年8月18日と2017年2月10日に訪問し、午前中の時間に各クラスの観察を行った。それぞれバイリンガル教育、ニューメラシーの活動に焦点を当てて教室を回った。

ア バイリンガル教育

シンガポールは2言語教育を行っており、英語と母語となる言語の習得が課せられている。そのため就学前より英語・母語のバイリンガル教育が行われることになる。サラダ幼稚園では母語のクラスとしてタミル語・ヒンズー語・中国語が選択できるようになっている。

サラダ幼稚園の言語についてのカリキュラムは以下のよう示されている：

－ナーサリークラス 子どもが以下のことをわかるようになる。

1. アルファベットには字体がある
2. それぞれ音がある
3. 字体と音が組み合わせられて単語になる

－K1 子どもは

1. 語彙を拡大する
2. 文の構造がわかる
3. 自信をもって話す

－K2 子どもは

1. 喜んで話す
2. 知識や楽しみを得るために本を読みたがる
3. 言語の基礎的理解と技能を身に着ける

まず1番目に入ったK2のクラスでは2つのグループに分かれ「タミル語」の活動を行っていた。グループに一人教師がついている。まず園庭に出てヤシの木など園庭にあるものを見つけ、部屋に戻って園庭で見つけたものを話し合う。教師が園庭に何があったかを問い、ヤシの実など実物を見せながらそれについて話し合う。教師はタミル語で子どもと会話をする。スナックの時間をはさみ、ゲーム遊びに移行する。2～3人組になり、言語教材を使って遊ぶ。

2番目に入ったK1のクラスでは、2グループに分かれ絵を描き「タミル語」で簡単な説明をつけるという活動をしていた。同じくグループに一人教師がついている。その後1グループは集まって、ホワイトボードに貼られたオリンピック選手の写真を見ながら会話をする。教師は出てきた単語について説明しながら、その単語をホワイトボードに書いていく。適宜子どもは教師の言ったことを復唱する。

続けて2つのクラスに入り観察を行ったが、いずれも緻密なカリキュラムのもとに子どもが楽しみながら母語を身に着けていける工夫が見てとれた。また、教室内には英語と母語が併記されてあるなど、子どもを取り巻く環境そのものがバイリンガルである。

イ ニューメラシーの活動

サラダ幼稚園のニューメラシーのカリキュラムは以下のよう示されている：

－ナーサリークラス

- 1 分類
- 2 マッチング
- 3 パターン認識
- 4 1対1対応
- 5 1から10までの数

－K1

- 1 1から10までの数の認識の確定
- 2 11から20までの数の導入
- 3 1から10までの数の言葉
- 4 重さ
- 5 長さ
- 6 より多いか少ないか
- 7 お金

－K2

- 1 11から20までの数の認識の確定
- 2 11から20までの数の言葉
- 3 21から100までの数の導入
- 4 以前と以後
- 5 1多い、2多いことを数える
- 6 1少ない、2少ないことを数える
- 7 話の要約をする
- 8 足し算と引き算

最初に入ったK2のクラスでは、ビー・ポットという名前の玩具を使いシーケンスとストラテジーについて学んでいた(写真2)。これは企業と共同開発をしている玩具で、方向と何枚進むか決めてセットをすると目指す枡(絵)のところに動いていく、というものである。子どもはめざす絵を決め、どうやってビー・ポットを動かすかを考えてセットしなくてはならない。教師や見ている他児とその手順を言語化しながら動かすのである。シートは絵が印刷されたもの、絵カードが差し込めるようになっているものと種類が複数ある。

次に入ったナーサリークラスでは「正方形」について学んでいた。綿棒やアイスクリームバーなど異なる素材で正方形を作ったり、教室を出て正方形のものを探しに行ったり、正方形の歌をうたったりしていた(写真3)。

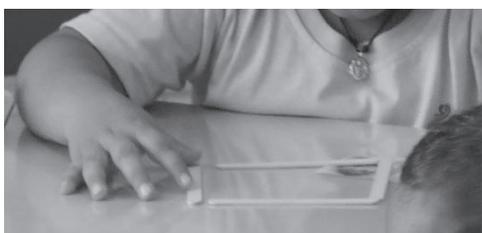


2-1



2-2

写真2 ビー・ポット (枠内) を使っての遊び



3-1 アイスクリームバーで作る



3-3 庭やホールで正方形を探す



3-2 綿棒で作る

写真3 「正方形」を自分で作ったり、実物を探しに行ったりする。



写真4 組み立てることで手順を学ぶ



写真5 数える教材

続いてK2・K1それぞれ1クラスに観察に入ったが、いずれもバイリンガル教育以上に教材が準備されていた。K2のクラスでは正しく組み立てるとランプが光る仕組みの教材を使っていた（写真4）。K1のクラスでは数の成り立ちをまなぶ活動が行われていた（写真5）。綿密なカリキュラムがあることはもちろんであり、教師も教授法についての研修が必須であることがうかがえた。

（2）聖ジェームズ教会幼稚園の事例；プロジェクトアプローチ

1）園の概要（メインキャンパス）

聖ジェームズ教会幼稚園は1977年に創立されたキリスト教系の幼稚園であり、メインキャンパスの他に2つのキャンパスがある。

サラダ幼稚園と同様4学期制である。午前中のセッションは8時15分～11時15分、午後のセッションは11時30分から2時30分である。

クラス編成はプレナーサリーで子どもと教師の比率は8対1でクラス定員は16名である。ナーサリークラスで10対1の20名定員、K1とK2が15対1の30名定員である。どのクラスも英語を話す教師と中国語を話す教師がペアとなりバイリンガルの環境となっている。K1とK2ではさらに算数とコンピュータの教師によるレッスンが加わる。

保育料は学年によって多少異なるが、諸経費を別にして1学期につき1450～1550シンガポールドル程度である。補助金を利用できるので個人によっては減額がある。

2）園の理念と教育内容

園のビジョンは「幼稚園では、すべての子どもが質の高い教育を経験し、全人格を陶冶され、神性を発揮する」というものであり、ミッションは「質の高い全体的な幼児教育を提供しキリスト教精神に基づく価値を養う環境を整える」ことであり、中核的な価値は「尊敬・慈しみ育てること・神性」である。



6-1

グローバルな視野を持ち常に最先端の幼児教育の動向にアンテナを張り、ヴィゴツキーの理論に基づくキー・ラーニングの教育方法をアジアで最も早く取り入れた。いくつもの先進的な取り組みから、「よいと思われるものを集めて組み合わせ（園長談）」カリキュラムが構成されている。

3）観察内容

2016年の8月16日と2017年の2月9日に訪問した。K1クラスの午前中のセッションの観察と3つのキャンパスを視察した。ここでは8月16日に行ったK1クラスの観察の内容を記す。この日は第3学期に数週間かけて行うプロジェクトアプローチが保護者に向けて披露されるオープンハウスの数日後であり、室内の展示がそのまま残されており、展示物を通して一連の活動がうかがえた。

園のカリキュラムによれば、プロジェクトアプローチは以下の3つのフェーズを含む：

フェーズ1－ブレインストーミング、問いを立て、討議し、計画を立てる

フェーズ2－探求、インタビュー、フィールドトリップ

フェーズ3－選択、情報の整理、提示

観察時当日、入室したクラスでは2グループに分かれて1グループは英語、他方は中国語の活動を行っていた（写真6）。スケジュールを参照（写真7）すると、すでにフォニックスのレッスンが終わり、英語と中国語のグループに分かれて活動をしているところであった。この活動は45分続き、英語グループは「光」というテーマで教師が影絵をしたりテーマに沿った絵本を読んだりし子どもと話し合いをしていた。途中で出てきた単語などはホワイトボードに書き込んでいる。他方の中国語のグループは中国語の文字や単語に親しむ活動をしており、単語カードを使ってゲームをしたり教師と子どもがいっしょに文字を読んだりしていた。



6-2

写真6 英語のグループと中国語のグループ

続く30分は、1グループはキー・ツー・ラーニングを担当する教師が足し算についての活動を行い、他方のグループは外遊びに出た。その後はイレギュラーで視覚検査が行われた。

室内は「パペット」というテーマで継続された活動の展

開がよくわかる展示で満たされて

いた。造形作品だけでなく、考えるスキルを身につける活動の足跡が表されている。先に述べたようなフェーズごとの展開もよくわかる。

それがECDA⁷である。

Time	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
8.15 - 8.30	Snack				Snack Library Prog Spelling/Dictation
8.30 - 8.45	Devotion	Devotion	Devotion	Current Affairs	
8.45 - 9.00	Phonics drill		English Workbook + Reader	Music & Movement @ K2 Hall	MATAL / Learning Centres
9.00 - 9.15	English Mini Project				
9.15 - 9.30	/ Chinese		Chinese Reader		
9.30 - 9.45	@ Classroom/K1 Hall				
9.45 - 10.00	Math / Outdoor Play @ Creative Sensory Playscape (odd) Nature Playscape (even)		Math / Outdoor Play @ Playground		MSD @ K1 Hall
10.00 - 10.15			Art & Craft	Learning Centres	Chapel
10.15 - 10.30	Computer 10.25-11.05				
10.30 - 10.45	/ Key to Learning Construction / Logic / Story Grammar				
10.45 - 11.00					
11.00 - 11.15	Story Time / Dismissal				

写真7 スケジュール表



8-1



写真8 キー・ツー・ラーニングの教材 (左) と実物と抽象的概念の指導 (右)

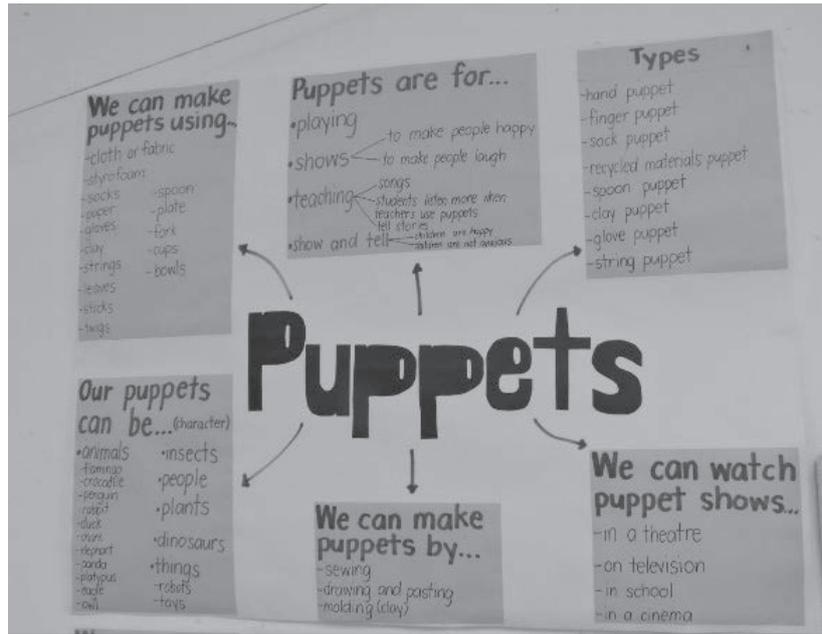


写真9 パペットの概念図

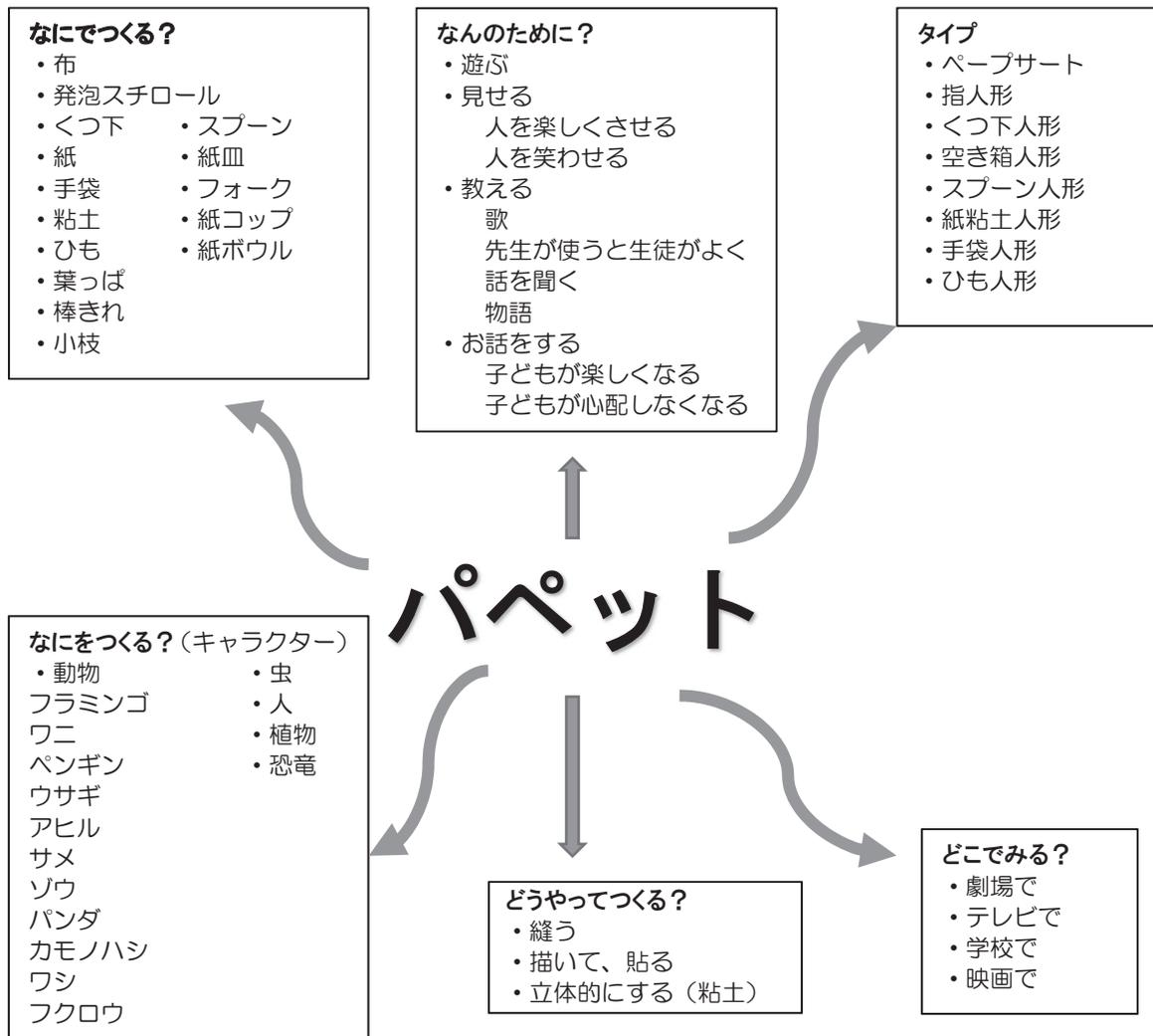


図1 パペットの概念図の内容

4 考 察

シンガポールのNELと日本の幼稚園教育要領を比較すると、基本的な構造は共通していることがわかる。幼稚園教育要領（平成29年改定、以下教育要領）と、同解説書を一緒にしたものが、内容的にも量的にもNELに相当する。

NELではカリキュラムのフレームワークの出発点に「子どもの姿」を置き、教育要領では「幼児期の教育における見方・考え方」を置いている。

シンガポールの初等・中等教育全体を通して向かう「教育の望ましい成果」は、日本の高校教育終了までに育む「資質・能力」に相当する。そのために「就学前教育段階の成果」として子どもの8のありようが示されているが、それは教育要領に示された10の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に相当する。

NELでは「学びの領域」「学びのゴール」として示されているものが、教育要領の場合は「領域」「保育のねらい＝幼稚園教育において育みたい資質・能力」に相当する。しかし日本の場合は「ゴール」という到達目標ではなく、方向目標としての設定であることには十分留意しておかなくてはならない。その上でNELの「学びの構え」とされるものは教育要領の「幼稚園教育において育みたい資質・能力」と見なすことができるだろう。

教師のアプローチはシンガポールではiTeachとまとめられているが、日本の教育要領では第1章総則・第1に幼稚園教育の基本としてまとめられている。

NELと教育要領の大きな違いは、順に「学びのゴール」「ねらい」に到達・達成するために教師が指導すべきことについて、NELには先に示したように詳細なリソースブックがあり、教育要領の場合は第2章ねらい及び内容に書く領域の「内容」「内容の取り扱い」として大綱的に示されるにとどまっている点である。

事例として取り上げたサラダ幼稚園、聖ジェームズ幼稚園に見られた指導方法はそれぞれの独自性はあるものの、これらのリソースブックの内容に忠実に沿っていることが見て取れた。両園の園長は共にECDAフェローと呼ばれる立場にあり、シンガポールの幼児教育の牽引者的な存在であることも書き記しておかなくてはならないだろう。

シンガポールの幼児教育はここ20年足らずの間に急速な変化を遂げた。政府が強いリーダーシップを持ち、世界の最先端の幼児教育実践、研究成果を貪欲に吸収し、NEL及びリソースブックにまとめあげ、こう言ってよければ強

烈な上意下達により今日の姿となった。それに比べ日本には、平成29年の教育要領前文にあるように、「長年にわたり積み重ねられてきた教育実践や学術研究の蓄積」がある。シンガポールでリソースブックに集積されている教育方法は、日本では各園の「特色を生かして創意工夫を重ね（同前文）」ることに委ねられている。

このような歴史的背景と、半日のプログラムであることから「自由遊びを入れられない（サラダ幼稚園ジェネラルマネージャー談）」シンガポールのKGと、保育所・認定こども園は全日プログラムであり、幼稚園においても6時間程度のプログラムが標準的になっている日本の現況から、自由遊びの時間を確保できる日本の状況という、二つの相違がある。

ま と め

シンガポールと日本の幼児教育は、歴史的経緯と子どもの就学前施設での生活や遊びの枠組みが異なるために、幼児教育の出発点となる枠組み、つまりNELと幼稚園教育要領では内容に双方の特色を備えつつ子どもを主体として捉え遊びを中心としたアプローチを標榜しながらも、実際の教育場面の様相は大きく異なる。両国の幼児教育場面を比較するならば、シンガポールは教師主導の色合いが強く、日本では環境を通して子どもを教育することを標榜する。

計画性という観点からすると、シンガポールではNELからブレイクダウンされた各セッションの目的が明確であり獲得されるべき知識や技能が明示される。これに対し日本では教育要領が大綱的であり、かつ目標は方向目標として示され、心情・意欲・態度を重視することから、各セッション（＝日案）までブレイクダウンされた時に、一定の知識や技能を獲得することをセッションのねらいとしては設定しづらい。教材の観点からすれば、シンガポールでは各セッションにおいて一定の知識・技能獲得に向けて的的な教材が準備される。これに対し日本では子どもの活動を豊かにする教材が十分とはいえない状況にあることを否定できない⁸。

教育要領は幼児教育の場において一定の知識・技能の獲得を目指してはならず、「知識及び技能の基礎を育むよう努める」とある。教育要領には「第1章の第1に示す幼稚園教育の基本を逸脱しないように（第2章ねらい及び内容前文）」とあり、特定の知識・技能に焦点を当てることに対し十分な注意を払うことはもちろんである。しかしながらシンガポールのカリキュラムの枠組み及び教育実践との

対照は、日本の幼児教育における「教材を工夫（第1章総則）」することが大きな課題であることを示した。

注

- 1 =Trends in International Math and Science Study。
- 2 埋橋玲子（2017）「シンガポールの幼児教育・保育(1) 概況と背景」『総合文化研究所紀要』第67巻
- 3 同上。
- 4 Ministry of Education (2012) *Nurturing Early Learner: A Curriculum Framework for Kindergartens in Singapore*.
- 5 埋橋玲子（2017）「シンガポールの幼児教育・保育(2) 質の認証システムSPARKに注目して」『現代フォーラム』第13号
- 6 K1・K2はそれぞれ日本の4歳児クラス、5歳児クラスに相当する。
- 7 ECDAのホームページ：<https://www.ecda.gov.sg/>
- 8 埋橋玲子（2017）「ECERS-3の紹介と実施結果」、
「幼小接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究<報告書>」第2章第1節、国立教育政策研究所平成27~28年度プロジェクト、pp134-139

*この研究は2016年度同志社女子大学の研究助成により執行されました。ここに記して感謝の意を表します。